

この世にはいない

クラウン

この世にはいない

死の間際、走馬灯を眺めながら、人生を振り返る時間がある。
その真偽を知っている者は、既にこの世にはいない。

暗闇の中に灯籠がひとつ。男性が二人。

「いらっしゃい」

男の明るい声が響いた。

声を頼りに、ここはどこですか、と彼は尋ねる。

闇の中、声を掛けた男は人好きのする笑みを浮かべた。年の頃は五十を越えている。頬がふっくらと丸いせいで柔らかな印象がある。

「大抵の客人が、同じことを言うんだそうです。まア、聞いた話ですがねエ」

彼は今一度、ここはどこかと繰り返した。

「ああ、これは失礼しました。ここはまア、夢の中みたいなもんですよ。

やっぱりそうですよねエ、ハイ。嘘だろうって言われると思ってました。こっちとしてはそうですとしか言いようがないんですよ」

数拍の沈黙。

「まア、開けっぴろげに言いますとねエ、あなた死んだんですわ」

彼は愕然とする。まだ自分は働き盛りだ。死んでなどいられない。未練を切々と語る彼の話、男は黙って何度も傾き耳を傾ける。

「ふむ。なかなかじゃアないですか。ちいとばかり早すぎる気はするが、お子さんは立派に成人して、奥さんもまだまだ元気だ。あなたが居なくてもやっていけるでしょう」

男は灯籠に火を入れた。ぼんやりとした灯りが二人の顔を照らす。

カラリ、カラリと乾いた音を立てて灯籠が回り始める。

彼は男の顔を見て、息を呑んだ。目を細め、視線を落として穏やかに口角を下げる。

男は彼に掌を差し出した。

「いやー、世話になりました。あなたはあたしを随分こき使ったからねエ。

学生の頃なんて、本当、逃げ出したかったですよ。まア、お陰でインターハイの記録を塗り替えたりした訳ですから、文句は言えませんがねエ。高校の頃、覚えてます？」

彼は今までの人生を振り返った。過ぎ去った出来事が走馬灯のように駆け巡る。

やり残した仕事は部下が引き継いでくれるだろう。がむしゃらに働いたお陰で、家族の生活には困らないだけの蓄えがある。

思い返せば充実した人生だった。彼はひとつ頷いて男の手をしっかりと握り返す。

「あなたと一緒に過ごした五十二年間、楽しかったですよ。

それじゃア、また。……逝ってらっしゃい」

カラリ、カラリと音を立てて、灯籠に灯る炎が消えた。

肉体には持ち主の記憶が宿るといふ。朽ちることで成仏する肉体は、彷徨う自分の魂を導く役割を担う。

その真偽を知っている者もまた、この世にはいない。